

昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育 (2)

—キリスト教幼稚園「父の会」に貢献した人々—

山 森 泉

1. はじめに

JKU (JAPAN KINDERGARTEN UNION) の年次報告に「両親教育」が取り上げられるのは、昭和6年(1931)である。E. L. ヘンプステッドは「両親教育と卒園生へのフォローアップ」と題した文章の中で、「父の会」を実施している園は多くないけれども参加した父親は関心を示しており、継続して実施することの意義を述べている。また、フルトン夫人による「父の会」の報告にも、教師たちが軽食を準備している間に、出席していたクリスチャンの父親の一人が、会の進行役を務めていたこと、出席した父親にとってもこの会合が成功だったこと、毎月の定例ではないにしてもこの種の会を持ちたいと考えていることなどが述べられている。^(註1)

昭和15年に発行された「本邦保育施設に関する調査」によれば、「父兄会」(父の会)を行っている幼稚園は実数で6園、割合が4.1%であり、「母の会」実施の286園、86.1%に比してごく僅かである。^(註2) 出席者が少数で組織化されていない「父の会」が継続的に実施されるためには、出席者または主催者側に中心となる人物が存在していたと考えられる。

毎月定例で開催され、園との関わりも密接である「母の会」は、記録類が保存されている園も多い。しかし、定例化されていない「父の会」の場合は、まとまった資料が残されていないのが現状である。キリスト教保育伝来120周年記念行事に向けて、あるいは創立何周年記念ということで、資料収集が行われているケースもあるが、「父の会」を取り上げて収集・報告している例はほとんどないようである。資料が散逸しないうちに、関連する資料を洗い出し、整理しておく必要がある。

本稿は、『紀要』36号に引き続き資料的に限られた範囲ではあるが、日本メソジスト金澤教会(現：金沢長町教会)に連なる三つの幼稚園で昭和初期に開催された「父の会」について考察を加えたものである。^(註3)

2. 三幼稚園における「父の会」と体格検査

三つの幼稚園は、創設順に「川上幼稚園」「十四番幼稚園(現：清泉幼稚園)」「広坂幼稚園(現：長町幼稚園)」であるが、昭和初期の記録が残っているのは川上幼稚園、十四番幼稚園の二園である。

JKUの記録にも出てくる川上幼稚園の創設は明治31年(1898)である^(註4)が、現在園に保存されている記録は、大正4年から昭和2年までは部分的である(次の記録が始まるのは、昭和9年からである)。在籍人数や毎週の保育項目を記した「幼稚園記録」も「母の会」の記録も同様で

山 森 泉

ある。^(註5)「母の会」の開催時刻は次第に午後2時頃に移行してきたものの、当初は夜7時半のことが多く、昭和8年には父親の参加も含めた「父母の会」として以下の3回が行われていた。

表1 川上幼稚園「父母の会」

昭和	日 時	内 容
8年	3月 8日	父母懇話会：来会者21名。(注・父母別の記入がなく、父親の参加は不明)
8年	10月18日	午後7時半から「父母の会」を開催。来会者、父5人、母11人。会の開くまで蓄音器にて時を消費す。
8年	10月21日	午前9時半より感謝祭を開く。来会者は母親28名、父は2名のみ出席。他に金沢育児院の保姆1名と院児9名が来会した。

これらは父のみではなく、父母共に参加した会である。「父の会」と称した記録に限れば、昭和9年6月に行われた「父の会」になる。その記録に「初めての開催である」などのコメントが記されていないのは、それ以前から実施されていたためではないかと考えられる。

十四番幼稚園は宣教師館に昭和3年(1928)に創設された幼稚園であるが、記録自体は昭和7年から始まる。また、日本メソジスト金澤教会の記録である「四季会記録」^(註6)も散逸しており、戦前に限ってみれば昭和12年から14年までの記録しかない。これらから「父の会」に関連したものを抜き出したのが、表2「父の会」記録である。

表2 「父の会」記録

昭和	十四番幼稚園		川上幼稚園		広坂幼稚園	
9年	11月	夜父の会を開く 12人 初めての試み 村上先生司会お話	6月22日	夕7時半～ 父の会 出席者9人 白石先生にお礼		
10年	11月	第二回父の会 8人 午後7時半より 広坂教会牧師 高柳先生お話	2月25日	7時半～ 村上先生を中心に幼 児の健康と取扱方、 大変に有益な会で あった。 出席者14人		
11年	11月19日?	第三回父の会 8人 村上賢三先生お話	2月28日	父の会(9人) お話高柳牧師		
12年		※なし		※なし	不明	※父の会1回 出席3人 村上先生に励まざる (下半期記録なし)
13年	1～3月 4～6月 7月～	※なし ※なし		※ナシ		※なし ※なし
14年		※なし ※なし				※なし

(幼稚園記録より。※印箇所は日本メソジスト金澤教会 四季会記録より。)

註1. 「※なし・ナシ」は「四季会」記録の諸集会「父の会」の項目に、「なし」と記されていることを示す。

註2. 空欄は、幼稚園記録にも「四季会」記録にも記載がないことを示す。

註3. 送り仮名・仮名遣いは原文のままである。

昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育 (2)

昭和9年から12年にかけて「父の会」を担当したのは2名の牧師(白石・高柳)と「村上先生」である。牧師はそれぞれ日本メソジスト金澤教会の当時の牧師であるから、当然の人選と考えられよう。昭和10年(1935年)時点での年齢を見てみると、第15代牧師(1933～1935)白石喜之助(1870～1942)は65歳、第16代牧師(1935～1938)高柳伊三郎(1898～1984)は37歳、第17代牧師(1938～1940)草間信雄(1905～1979)は30歳であった。白石牧師は親の年齢から考えるとかなり年上であるが、高柳牧師は6人家族で何人かの子どもがいたことから、牧師として語るだけではなく、父親たちの思いも共感できたのではないだろうか。一方の「村上先生」は、当時金沢医科大学(現在の金沢大学)助教授の村上賢三(1895-1993)であり、三園以外にも体格検査(身体検査)を担当していた。^(註7)「父の会」同様に三園の体格検査の実施状況を表3にまとめた。

表3 体格検査の実施状況

昭和	十四番幼稚園		川上幼稚園		広坂幼稚園	
7年		記録上に記載なし				
8年	6/10	母の会 5月園児体格検査概評を村上先生にして頂く				
9年	5月 6/12	体格検査をなす 例年の如く村上先生体格検査の結果に付お話を願ふ	5月 6/13 11/18	村上先生によりて 母の会体格検査発表 秋季体格検査 村上先生		
10年	6/24	母の会、村上先生の体格検査結果に付お話を聞く	5/17 6/17 10/9	体格検査 母の会 体格検査発表村上先生より 体格検査 村上先生によりて		
11年	8/2	母の会開催、ミス、リンゼイのお話及び体格検査に付お話を伺ふ	5/6	園児体格検査 大学の村上先生		
12年	4/22	園児体格検査を行ふ	4/21	体格検査	6月	※村上先生体格検査報告会
13年	6月	体格検査概評、高口保明氏園医村上賢三氏応召出征中高口氏に園医を願ふ	5/2 5/19	体格検査 村上先生北支へあらしめるために、高口先生と滝田先生とで子供の体格を調べて下さる 母の会 体格検査報告、一人一人のお母様に話して下さったので、本当に有意義なことであった。		
14年		※(3月以降の幼稚園記録なし)	5/8 6/8	体格検査 体格検査発表母の会をす。一人一人高口先生より伺ふ		
15年						
16年						
17年			5/50	園児の体格検査行ふ 大学病院衛生教室の山森氏が来て下さる		

記録に残されている範囲では、昭和8年から12年まで園医として村上が三幼稚園に関わっていた。三園とも村上に体格検査を依頼していたことに変わりはないが、同じ教会に連なる幼稚園でも健康意識に差が見られ、年に一度実施の園と二度実施の園とがある。十四番幼稚園が昭和9

年、「例年の如く」体格検査を実施した記述から考えると、昭和8年だけでなく7年以前も村上に依頼していた可能性がある。

広坂幼稚園に関しては、村上先生による「父の会」に3人しか出席していないという昭和12年の記録しかない(表2参照)が、他の二園に比べて出席人数の少ない理由が2点考えられる。一つは、広坂幼稚園在園児の家庭環境である。四季会記録には、三幼稚園の行事や母の会開催回数、出席平均人数などが報告されている。中でも広坂幼稚園は商家が多いため「母の会」への出席者が少ないので、代わりに家庭訪問を増やしたことが報告されている。もう一つは、時代が日中戦争に向かって進んでいたからである。市内キリスト教七幼稚園合同の運動会や川上幼稚園バザー中止などがあり、十四番幼稚園では出征家族への配慮もあって9月の「母の会」までも中止となっている。^(註8)

日中戦争に突入した昭和12年、金沢にあった第七連隊が出征したため、市民生活も幼稚園児の家庭も様々な影響を受けていた。このような状況の中、村上も昭和12年7月以降軍医中尉として北支に出征し、村上出征後は衛生学研究室の高口保明が幼稚園の体格検査を引き継いだ。^(註9)

3. 二人のクリスチャン園医

村上が北陸女学校や金沢市内の幼稚園などで体格検査を行うようになったのは、金沢医科大学衛生研究室で恩師星野鐵雄の門下生であったからである。^(註10)

星野鐵雄(1890-1931)は東京帝國大学医学部助手を経て、大正11年欧米諸国への留学を命ぜられ、帰国後は金澤医科大学最初の衛生学教授として大正13年に着任した。クリスチャンであり、北陸女学校(現在の北陸学院)最初の日本人理事としてその経営にも参与した人物であるが、病のため42歳で世を去っている。昭和6年12月のことであった。昭和7年1月に村上が北陸女学校の衛生嘱託になったのは、病に倒れた星野の後任ということである。

星野自身は、昭和2年に妻が死去した後、三児の父親として育児もしながら研究・講演に活動を行っていた。その事業は衛生文化思想普及会発行のパンフレットとして第1輯から第26輯、及び別輯が自費出版の形で発行された。^(註11) その中の1冊に、昭和5年に発刊された『愛児のために何を為すか』がある。これは星野亡きあとも版を重ねて昭和8年には第7版が出されている。一方、衛生文化思想普及会発行の村上の著書には昭和9年発刊の『子供の健康』がある。^(註12) この2冊は、健康・衛生に関する同普及会の出版事業の中でも、特に「子ども」に焦点を当て若い両親に向けて書かれたものといつてよい。

同じ研究室の衛生医星野、村上が出版した2冊の内容には共通するものがある。(資料1. 2. の目次参照) また、星野の『愛児のために何を為すか』にも、「前輯のパンフレット『睡眠の話』には、村上助教授が、既に、詳しく述べてゐますから、私は二重にならないやうにして、私の気付いてゐる点や、経験してゐるところを、簡単に書いて見たいと思ひます。」とも記されている。(138P)

目次を見て明らかなように、星野より村田の方が医学的な要素や健康問題の部分が大きな比重を占めている。実際、『子供の健康』では衛生・健康面の記述が総122ページ中91ページと、75%を占めている。『愛児のために何を為すか』では232ページ中95ページ、約4割である。しかし、『子供の健康』のはしがきによれば、この書は知識を満たすものではなく、「一学徒とし

て、子供の親として、読者の友として、極めてありふれて日常の問題を取り上げ、そのうちに新しい意義と感激を見出し、これに対しより正しく、より真実に、共に生きたいと希うのみ」とあり、親としての意義を重視した村上の前向きな姿勢を示したものとなっている。

4. 『愛児のために何を為すか』に見られる星野の育児体験・子ども観

星野鐵雄は、「衛生文化思想普及会」の設立について、『愛児のために何を為すか』初版の「はしがき」で次のように述べている。

丁度三年前のことでありました。

私は日本全体の健康状態を考へ、殊に北陸の不健康な有様^(註13)を見まして、これはどうかしなければならぬと、切に感じたのでありました。そして死亡率低下運動、健康増進運動を始めやうと決心しました。どうして死亡率を低下せしめやうか。どうして健康を増進せしめやうか。それには、先づ衛生思想を普及せしめねばならぬ。筆と口とを以て、健康増進に関する必要な知識を、提供せねばならぬと考へたのでありました。

そしてこの運動の具体化として、「衛生文化思想普及会」なるものを、私独りでつくりました。この会が主体となつて、最初の仕事を始めたのが丁度三年前の二月で、衛生文化パンフレットの第一輯『保健衛生の根本問題』を出版いたしましたのでありました。

このように、設立当初は健康問題の解決が目的であつたが、昭和6年3月18日に出版された『愛児のために何を為すか』の「第5版へのことば」では、

昨年来、家庭教育の問題が非常な熱心を以て考へられるやうになりましたに就いても、この種の書物が余り多くないといふことでありますから、この本はその独特な点を通してさらに広い範囲の読者に歓迎されるのであらうとも思ひました願つてやまぬ次第であります。

とあり、家庭教育や父母の姿勢やあり方を重視するようになっていく。初版では、巻末に載せたお母さんに読んでほしい本は31冊だったが、第6版では6冊増えている。そのうち4冊は、「両親のための一般心理学」「母のための教育講話」など、教育的な分野の本であることから、星野の熱意を見ることができる。

星野は、自身が関わった子育てや自分の子どもについて

子どもは神のものであります。私はそう信じています。この考えを以つてわが子にのぞんでいきます。そして子どもを通じて、どれ程多くの事を学んでゐるか知れません。(中略)人は真に子どもを与へられることによつて、深うせらるるものであります(30P)

社会が本当に必要とする人は、至誠の人、熱意の人であります。

私は、どうかして、わが子をかゝる熱誠の人に育て上げたいと願つてゐるのであります。私の願望が、満たされるかどうか知りませんが、私はこの願を私の死の床まで把持して離さぬつもりであります。(87P)

精神的存在なる私たち人間は、やはり精神的な太陽が必要なのであります。その光とその熱とはどうしてもなくてはならぬのであります。信仰の人といふのは、この光と熱とに、浴した健全なる生き方をする人のことをいふのであります。(96p)

と述べて、信仰面から子どもを捉えようとしている。また子育てについては、父母どちらの愛であつ

でも単独では子どもがよく育つか疑問だと述べ、子どもを育てるのに両親の協力と愛が必要であること、夫婦のどちらかが亡くなった場合も含めて、両方の立場から子どもに接していくことを奨励している。

父母は一体となり、相補ひ相矯めて、その子の上に、完き愛を注ぎかけてのみ、子どもは、最も善く、最も美はしく、育つのであります。父が欠けても困ります。母が居らなくても困ります。さりとて、父母共にあらば、それで充分かといふに、必ずしも、そうでないことは、説明するまでもないことです。(中略)私の素直な感じを申しますと、私の子どもは、私のものであると思つてゐます。彼らの母が永眠しました現在に於いては、彼等の父は、彼等にとつては、普通の場合よりも、別な意味に於いて一層父であるやうに思はれます。彼等は母に甘へると全く同一な心理で、父に甘へるやうであります。父はまた、母なきが故に、母の分まで尽してやりたく思ひ、また力めて尽しています。(中略)子どもは母のものであると同時に父のものでもあります。百パーセント、父と母のものでなければならぬのであります。といふ意味は、父と母とは精神的に全く一体となつてゐなければならぬといふことであります。(20P)

私は5万前後の夫を失つた方々と、妻を失つた方々とに、心の底から私の苦い経験より湧き出る同情を御寄せします。(47P)

星野が子育ての体験を語った部分では、妻を亡くした体験だけでなく、育児の面でも自身のつらい体験を述べることで、世の母親たちの立場に立って子どもを育てるつらさを共感し、支えている。医者でありながらこれほど母親側に寄り添える人物はそう多くはいないであろう。さらに、星野は子どもを亡くしかけたという体験もしている。以下に引用する。

月足らずの弱い弱い、二ヵ年といふもの、殆ど病気でないときはなかつたといふやうに弱い子どもの眠りについては、私もつらい経験を致しました。(中略)乳母が居なくなつてからの半年間は、実になんともいへぬ、つらい経験をなめました。寝つきの悪いのに、夜中になつてないで、幾度も幾度も起きねばならぬことが続いたのにはまゐつて仕舞いました。(中略)母のない子を世話して見て、母の仕事のいかに骨の折れることかと、本当に解つた気がします。母の居る頃、夜中に子どもを泣かしたとて、怒つたりしたことが、済まぬことであつたとも後悔されたりします。

弱い子をかくの如く世話する沢山の母さん方に心から同情します。然し弱ければ、弱い程、母さん方の骨折なしには、育たぬのでありますから、御辛抱を願ひます。(148P)

私はつらい経験を持つてゐます。長男は生れた時には、もう絶息してゐました。一生懸命の努力で、漸く息をふきかへさしましたが、母の方が重病なのと、未だ月が足らなかつたのとで、生れた日の午後には、赤ん坊一人を入院させねばならなかつたのであります。(中略)次男でもつらい思いを致しました。一ヶ月以上も早く生れさせなくてはならぬ母の健康状態のために、医師の骨折りで漸くに生れはしたものの、乳をすふ力さへもないのであります。母の乳を飲ませると直ぐ熱が出るのでありまして、近所の人乳を貰つてのませる、牛乳を加へる、色々として見ねばならず、中々の骨折りです。(103P)

と、二児の出生時の大変だった状況を語っている。しかし、つらい体験だけでなく、子育ての工夫や楽しさも次のように述べている。

母を失つた子供達の心を寂しいものにしたくない。その顔に子どもらしい、新鮮な輝やきを消さ

したくない、のびのびとした、本当に子どもらしい子どもに育てたいと、私は可也心を砕きました。それにはどうすればよいか。内容の方から申しますと、父の分と母の分とを合せて、愛を溢れるまでに、そぎかけてやること、形式の方からいひますと、その愛を、子供となつて遊んでやることに現はすこと。この二つで育てよう、私は考へました。そして遊んでやる時は、外の人が見たら、滑稽とも馬鹿げてゐるともみえるでありませうが、私は六つ七つの子供になりきつて、遊ぶのでした。(171P) ^(註14)

「むすび」では、「賢明教育」「敬虔教育」について不十分なため、まだ書き足したい事が沢山あるという思いを述べ、さらに、「愛児病む時」という書を加えて出したいと考えていることも記している。しかし、後日出版したいと書きながら、星野自身が病に倒れたため、その願いは実現しなかった。

星野は、愛情だけでは子どもを育てあげることができず、「理知の光によつて照され、反省し工夫し研究し練習して、始めて養教育を全付することが出来る」とも述べているが、これは「両親再教育」にも通じるところであった。^(註15)『愛児のために何を為すか』の「むすび」の中で、フレーベルの『人の教育』、倉橋惣三の『幼稚園雑草』など、愛児教育上の参考となる本を36冊挙げている。これらはいずれも、星野自身の手元にあるものの中から母親達に読んでほしいと考えたものである。その中に福永盾雄、福永津義共著『幼児教育の実際』(1929年)があるのは興味深いことである。「両親再教育」に関わった福永津義は、福井メソジスト教会の牧師であった盾雄とともに、神戸にキリスト教主義の幼稚園を開設して幼児の教育に携わった人物であるが、四人の子どものうち一人を幼いうちに失っている。昭和12年に夫が死去してからは、幼稚園教育を続けながら子ども達を育てたのであるが、信仰を支えとしながら、夫としての役割も引き受けようと決意していたという。

昭和2年に衛生文化思想普及会から発行された星野の著書の一つ『性教育に就て』がある。これは講演内容に加筆したものであるが、出版に際しては、巻末に付録「親子の会話」が載せられている。これは、家庭での会話を

- | | | |
|------------|----------|------------|
| 1、父の子の会話 | 2、母と子の会話 | 3、父と母の会話 |
| 4、父と母と子の会話 | 5、子と子の会話 | 6、父母と子等の会話 |

の場面に分けて載せたもので、1ページ約400字、25ページほどの分量である。星野はこれらの会話について、一種滑稽に感じるかもしれないが、自分の家庭で実際に話された事をそのまま書いたものだと、「はしがき」で述べている。さらに、進んだ読者^(註16)には必要がなくても、両親たちには何か参考になるかと考えて載せた旨を記している。実際、当時の親たちはわが子の質問にどのように答えたらよいのか戸惑うことが多く、性教育について関心や悩みを持っていた。昭和13年には川上・広坂幼稚園が合同の「母の会」を持ち、婦人矯風会教育部長のオールズ女史に性教育に関する話を聞いていることから頷けよう。^(註17)

星野は、このような親達にとって分かりやすいように、「日常生活の中で具体的に性教育を位置づけ」たのである。乳幼児期からの性教育の必要性を説いた星野を評して、村上は、「これが国に於て、衛生学的立場より性教育を取扱ひたる先駆」と評している。^(註18)しかし、星野の思いは衛生学的立場に留まらなかった。川合隆男は、このような星野の生き方を近代日本の生活研

究の視点から、「生活の具体性・日常性・民衆性」^(註19)と捉えたが、『愛児のために何を為すか』が版を重ねて親たちに支持されたのは、親のあり方の高い理想を掲げる一方で、自らの体験や家庭内の会話例を示すような共感的な姿勢があったからであろう。

5. 『子供の健康』に見られる村上の子ども観、育児観

一方の村上も星野門下の一員として医療や研究に携わる他、三児の父として子育てに関わっていた。そのため、医学者の目と、親の心との両方から若い親たちに伝えたいことを、『子供の健康』に記している。村上は、星野の遺稿集を中心となって企画・発行するほど、星野に私淑していた。星野は人格的に優れているだけではなく、村上にとっては同じように子育てに関わっている上、クリスチャンでもあった。

村上は3年ほど乳幼児健康相談所に関係していた間に、母乳が出るにもかかわらず人口栄養品を与える母親達が多い実情を知って嘆き、「この母親たちの多くは、その子供を熱愛する点では熱心であるが、然したゞ無知なるが為に『愛児のために何を為すか』を知らない、乳児の栄養として如何に母乳が尊いものであるかを知らない」と文中に星野の著書を入れて述べている。このほか、『子供の健康』の最後には「育児問答」として、対話形式で若い母親の悩みに答え、育児の手ほどき・アドバイスをしているが、これも星野の著書の影響があったと思われる。

村上の『子供の健康』は昭和9年6月に出版されているが、同年11月に十四番幼稚園で初めての「父の会」が村上の司会・話ということで開かれたことは偶然ではないだろう。母親達は「母の会」で体格検査の結果報告として村上の話を聞いている。また、「母の会」などで語った内容を中心に『子供の健康』がまとめられている。母親達はその話を自分の夫に聞かせたいと考えたに違いない。JKUの年次報告や幼稚園同士の情報交換の中で、「父の会」を開く動きが高まってきたときに、まさに適任の人が登場したのである。子どもの健康診断をしてくれる医師であり、妻任せではない子育ての経験を持っている。しかもキリスト教幼稚園にふさわしいクリスチャンである。

子育てをするときの親の態度が何で決まるかについて、村上は

とりもなほさず一家の人々が同じ信仰にもとづいて生活すると云ふことに外ならないのであります。信仰なき家庭、信仰なき生活、それは目的地もなければ、舵もない船が大海にたゞよってゐるにも似たものであります。私達は確固たる信仰の上に立つて、日々の生活を正しくつゞけてゆくと共に、わが子の養教育に対しても子の信仰の上から光を与へられ、力を与へられてゆきたいものであります。(12P)

と述べている。これほど信仰の大切さを説いてくれる医師が他にあるだろうか。このような村上の言葉に、各幼稚園の園長、主任だけでなく、「母の会」幹事達もぜひとも願ったことであろう。「父の会」に出席できない夫の為に、村上の著書を見せたかもしれない。

一人の親としての村上の姿を、次のような記載の中に見てとれる。「親の態度」の項では、「私の長男も今年数え年八つになって四月から小学校へ入学することになった」と書き、入学前の予備検査の結果、「体格は中等で、いろいろの知能検査はよい方であった」ことを聞いて「今迄よりも一層真剣な気持でわが子を見る」(7P)と述べている。健康法の紹介例として、「私は今年五つ

と六つとになつた自分の子供と、毎朝裸体で相撲をとつたり、裸体体操をしたりする」のに対し、風邪を引くと心配する老人(祖父母か)とは裏腹に、「子供は裸体でとび歩いたり相撲をとつたりすることを大変によろこぶ」と書いている。

また、子育てに対する親の姿勢や態度について、

小さい末梢的なことに力を入れる前にもつと大切な、もつと根本的な、わが子に対する私達親の態度をはっきり決めなければならないのであります。子供の教育のこと、子供の健康のことを口にする人は多くありますが、然し如何なる場合でも、わが子に対し教育的であり、且つ強育的態度をとつてゐる親達は極めて少ないやうである」(8P)

と述べている。星野は参考文献として倉橋惣三の著書を挙げていたが、村上也倉橋のラジオを聞いて倉橋の主張に同感したことを記している。さらに信仰面も含め、幼児の生命、幼児の霊をもつとも健全に育みゆく道は如何にすべきかについて、児童心理の知識、医学の知識に増して「霊的環境」を作ることとしている。

更に積極的に云ふならば、幼き日に宗教教育を施すことが極めて必要(29P)

昔の母親達は言葉は少なかったが、わが子の為に黙々として真剣に働いたのであります。(中略)

敬虔な祈り心を以つて実行したのであります。(9P)

と述べている。村上是『母の会』の使命の項で、最近文部省の主唱で日本各地に「母の会」が生まれたことを挙げ、文部省主唱のもとに生まれた「母の会」も、それ以前から既にあった「母の会」も、全てを含めた広い意味で「母の会」を捉えている。その上で、会の使命は、「母親達が已むに止まれぬ母親達の誠と熱とにより、母親達の間から生まれるべきもの」としている。また、体格検査後の「母の会」に関して、母親達の真剣な質問の態度を評価し、その質問に対し充分に答えられないことはあつても、「同じ問題について、共に考え、共に慰め合ふ、そのことがすでに大きな意義」があるとも述べ、母親達の集まりや子どもへの関心を好意的に捉えて対応している。(31P)

また、「離乳問答」の中にこのような箇所がある。子どもの便通を毎日注意して見ているかを村上が尋ねたところ、母親は回数は気をつけているが、それほど詳しく調べてないと答えている。それに対し村上是、「どうです。「母の会」あたりで自分の子供の便を調べる申合せでもしては、面白い試みじやありませんか。」と語っている。この表現などは、村上が「母の会」を検査対象・調査対象の組織としても見ていたことを示す格好の例ではないだろうか。

村上和「父の会」との関わりは、表2に載せてある。川上幼稚園の昭和10年の記録では、村上に語ってもらった内容が「幼児の健康と取扱方」で、有意義だったことも付け加えられている。おそらくは『子供の健康』の原稿に基づく類の内容であつただろう。直接「父の会」に関係していたことを示す表現としては、次のような記載がある。

子どもの健康状態をみる一つの方法として、私はかつて子供の「顔色をみる」ことの如何に大切であるかを述べたことがあります。上役の顔色を見る事は忘れても、わが子の顔色をたえずみる事をわすれないやうにとおすゝめをしたのでした。(62P)

「上役の顔を見る」という表現は、軍や社会で働く父親を意識した言葉であろう。「かつて」「おすゝめをした」ことがあるのは、おそらく「父の会」またはそれに準ずる場所で父親を対象に講

演をしたという可能性が考えられよう。

6. 終わりに

金沢医科大学衛生学教室に生まれた「衛生文化思想普及会」に関わった二人の医師、星野と村上は、単に研究者としてこの地方の衛生教育に携わったのではなかった。共に子を持つ父として、育児に直接関わりその苦勞と喜びを知るものとして、若い両親たちに、子育てには何が必要であるかを実践的に説いたのである。残されている資料は、演会や「母の会」「父の会」で語られた原稿そのものではないが、各講演会や集まりなどで話されたことを中心にまとめられたものである。星野が講演した実際の記録を見ることはできないが、著書の書きぶりや内容から、若い親たちにも講演をしていたことは明らかである。実際昭和6年5月の書簡にも、昨年に引き続き今年も母の会など教育会のための講演をする旨が記されている。^(註20) 親に話す機会はそう多くはなかったであろうが、普段彼らの話を聞く機会が多かった母親たちから評判を聞いて駆けつけた父親もあったに違いない。軍人たちも多くいた十四番幼稚園の父親たちは、あるいは金沢医科大学の衛生医としての星野の名を耳にしたこともあったであろう。

昭和9年、十四番幼稚園の保育料は従来月1円であったものを1円30銭に改定した。このほか蔬菜費、母の会費など40銭が必要であった。『愛児のために何を為すか』は定価1円、『性教育に就て』は初版80銭で、3版ハードカバーのものは1円となっている。決して安い金額ではないにもかかわらず、昭和2年2月に初版が出され、2版が8月、3版が9月と立て続けに再版されていることから、人々がこの種の情報(本)を求めていたことがわくろう。昭和9年発行の『子供の健康』の最後には、衛生文化思想普及会刊行のパンフレット一覧が掲載されている。16冊の掲載書のうち、売り切れ5冊、再版・新版などが4冊、『愛児のために何を為すか』は7版を重ねている。

星野や村上が自らの生活において実践し、父母たちにも伝えたかったことは子どもの養育問題であるが、「養育」と「教育」を統合させた「養教育」として、健康と人格の形成に努めたところに特徴があるといえる。さらに、養育する者が子どもを教え育てる中で、主体的な自己形成をしていくことが不可欠であるとの考えは「両親再教育」の考えに通じるところもあろう。

北陸の地において二人のクリスチャン医師が果たした役割は大きい。星野の若すぎる死と村上の出征がなければ、キリスト教幼稚園において「父の会」が継続・発展していった可能性を否定できない。死去・出征後も幼稚園における体格検査とそれに伴う「母の会」の集まりは継続されていた。しかし、いったん途絶えた「父の会」は戦後、参観という形で復活するまで記録には出てこない。

以上述べてきたように、「父の会」に関わった村上賢三と星野鐵雄の著書や活動を通して、当時の幼稚園教育や家庭教育に貢献していた姿を見出すことができよう。各幼稚園の記録や「母の会」の活動の記録などが残されている園も多く、それらの資料から様々な研究が進められている。定例化されなかった「父の会」に関しても出来る限りの資料を探し、断片的な資料ではあっても、そこから当時の父親を含めた家庭教育の姿を幼稚園教育の一つの側面として掘り起こしていきたいと考えている。また、自費出版の形で刊行された「衛生文化思想普及会」の書物に関しても、

当時の人々の衛生意識、養育観・子ども観を知る貴重な資料として、保存活用していくことも検討していきたい。

資料1『愛児のために何を為すか』目次

一	いとぐち	1
	乳幼児の愛護	3
二	子どもは誰のものか	9
	子どもは母のもの	10
	子どもは父のもの	14
	子どもは国のもの	20
	子どもは神のもの	26
三	母の愛	33
	最も大なるは愛なり	34
	母とは愛の別称	35
	母の愛の特徴	36
	現実に見る母の愛	39
四	父の愛	41
	主張する愛	42
	理解され難い愛	43
五	知識なくして子どもは育つか	50
	動物の育て方	52
	未開人の育て方	55
	文化人の育て方	58
六	子女教育の理想	66
	偉いものに	70
	本当の偉さ	74
	至誠の人	80
	熱誠の人	85
	忘私奉公の人	87
	信仰の人	93
七	愛児のために何を為すか	100
	1 愛児には健康を	103
	食べさせ方	105
	母の乳—授乳の義務—授乳の時間—授乳の仕方—	
	乳汁の分泌と精神作用—乳の出と身体の運動—	
	乳汁の分泌と母の栄養—離乳及その後の食べさせ方—	
	乳汁の分泌と精神作用—乳の出と身体の運動—	
	乳汁の分泌と母の栄養—離乳及その後の食べさせ方—	
	嘔むこと—間食に就いて	
	眠らせ方	137
	眠らせる場所—自然に眠る—眠りには安心—虚弱児の眠り	

山 森 泉

一母の睡眠	
遊ばせ方	154
遊び道具—玩具の用ひ方—遊ばせる場所—偕に遊ぶこと	
着せ方	173
薄着の利益—何を着せるか	
住ませ方	182
健康に適する条件—明るくする法—乾かす法—涼しくする法—暖かにする法	
2 愛児をば賢明に	195
正しき理解を	198
耳を通して正しき理解へ—眼を通して正しき理解へ—考へさせて正しき理解へ—	
手足を通して正しき理解へ	
3 愛児を敬虔なものに	215
至誠の根源	221
八 むすび	227

資料2 『子供の健康』目次

一 乳幼児の愛護	1
二 親の態度	7
三 「母の会」の使命	12
四 子供の頭	17
五 子供の特性	20
六 幼児の生命	24
七 体質異常の子供	30
(一) 神経質の子供	35
(二) 腺病質の子供	44
八 哺乳の危機	57
九 子供の貧血	62
十 子供の便秘	68
十一 夏と子供	74
十二 冬と子供	80
十三 子供は風の子	92
育児問答	100
(一) 若き母の訴え	100
(二) 偏食の相談	105
(三) 離乳問答	113

註 引用・参考文献

(註1) Fulton, S.P. 「FATHERS' MEETINGS.」 1932年

Hempstead, E.L. 「Parent Education and follow-up Work with Graduates.」 1932年

『ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』6巻 1-5. 日本らいぶらり

昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育 (2)

- (註2) 岡田正章監修「両親教育」『大正・昭和保育文献集』14巻 1979年 pp.317-321
中島寿子・田代和美・柴崎正行「わが国の戦前の幼稚園における家庭との連携の変遷について」『保育学研究』32号 1994年 pp.13-19
- (註3) 拙稿「昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育(1)―十四番幼稚園『幼稚園記録』より―」『北陸学院短期大学紀要』36号 2004年 pp.63-76
- (註4) 梅染信夫『北陸のキリスト教』梅書房 2005年 p.192
児玉衣子「北陸地方のキリスト教保育史―JKU年報から(2)」『北陸学院短期大学紀要』35号 2003年 pp.1-12
- (註5) 古い記録は大正4年5月に始まり、昭和2年11月に行われた音楽会のプログラムを貼り付けてあるのが最後であるが、実際の文字の記録としては大正14年2月までである。
- (註6) 金沢長町教会所蔵 日本メソジスト金澤教会 四季會記録 1937～1939年
- (註7) 北陸学院八十年史編纂委員会『北陸学院八十年史』1976年参照。ほかに、『子供の健康』(p.30)には、「四月、五月は、日本全国の幼稚園から大学に至る迄、春季の身体検査が行はれる時期であります、私達も例年の如く、金沢市及び附近の幼稚園を今年も十許り検査した」との記述がある。
- (註8) 註3、註6参照
- (註9) 高口保明は星野の記念集『伝記 星野鐵男』(衛生文化思想普及会 1933年)に学生代表として原稿を寄せており、村上の信任も厚かったようである。
- (註10) 北陸学院八十年史編纂委員会『北陸学院八十年史』1976年
- (註11) 「衛生文化思想普及会」発行のパンフレットは以下のようになっている。
その著書のほとんどは星野の手になるが、後に村上に受け継がれ、村上も3冊の著書を出している。
- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 第1輯 保健衛生の根本問題(星野) 売切 | 第2輯 清潔の徹底(星野) 再版 |
| 第3輯 環境の浄化(星野) 売切 | 第4輯 正しき生き方(星野) |
| 第5-7輯 家の話(星野) 売切 | 第8輯 水の話(村上) 売切 |
| 第9-11輯 顔の話(星野) 売切 | 第12輯 窓の話(星野) |
| 第13輯 東西の衣食住(星野) | 第14輯 健康増進に必要な知識(星野) |
| 第15輯 睡眠の話(村上) | 第16-20輯 愛児のために何を為すか(星野) 7版 |
| 第21-22輯 養教育の真髄(星野) 再版 | 第23-24輯 性教育の実際(星野) |
| 第25-26輯 子供の健康(村上) 再版 | 別輯 性教育に就て(星野) |
- 記念集 星野鐵男(非売品)
- (註12) 『子供の健康』の扉を一枚めくったところに、村上と三人の子どもの写真(昭和6年3月21日写)が載っている。その下には、「この書を三児の上に限りなき愛を注ぎ給ひし故星野鉄雄先生の靈に捧ぐ」との文章がある。
- (註13) 『石川縣史現代編(3)』(1964)によれば、当時、石川県の衛生状況は悪く、昭和11年調査でも乳児死亡率は全国最高であった。金沢市による対策として昭和5年乳幼児健康相談所が2か所の託児所に新設され、多数の利用者がいたという。星野は、このような金沢の地にあつて、幼児・児童・生徒の健康衛生のため、衛生講話や太陽燈、水洗便所の普及などに尽力し、出版事業も起こして衛生思想の普及に努めたのである。
- (註14) 引用本文中「子ども」「子供」の二通りの表記があるが、原文のままである。

(註15) 志村聡子「日本両親再教育協会における『母の会』の組織化—各地支部の事例から—」

教育史学会第48回大会発表資料 2004年

志村聡子「福永律義における『両親再教育』—日本両親再教育協会との関わりから—」

日本保育学会第58回大会発表資料 2005年

(註16) 「進んだ読者」とは、性教育の知識を既に持っている親たちを指すか。

(註17) 村上賢三・木村与一『伝記 星野鉄雄』 衛生文化思想普及会 1933年 p.261

(なお、1994年に、伝記叢書157として大空社から復刻版が出版されている。)

(註18) オールズ夫人著の『家庭と性教育』は昭和7年4月発行されたが、同月再版、7月に3版が出ていることから反響の大きさが推測できる。この本が十四番幼稚園に残っている。またオールズ夫人には幼児期からの性教育について母親向けに著した『生命のめばえ』の著書もある。

(註19) 川合隆男「愛児のために何を為すか 星野鉄雄」『近代日本の生活研究』 米生館 1982年 pp.127-149

(註20) 村上賢三・木村与一『伝記 星野鉄雄』 衛生文化思想普及会 1933年 p.261

第参部書簡に昭和6年5月30日の日付で京都の義母大石うめ子に宛てた手紙につぎのような内容が記されている。「昨年も六月は講演の月でしたが本年も六月は忙がしいことになりました。能登二箇所で三回の講演、市内教育界のために四回連続、四高、盲学校、母の会等のために話してやらねばなりません。」